

第1章

はじめに

1.1 調査にいたるまでの経緯

トウキョウサンショウウオは、雑木林と隣接する水辺を行き来して生活することから、東京都西部では里山の良好な自然環境を象徴する存在として知られてきた。しかし、その生態や分布については不明な部分も多かった。

長年にわたり本種の生態と分布を調べてきた八王子市の中学校教諭・金井郁夫氏による調査結果が、1979年に環境庁(当時)の「第2回自然環境保全基礎調査・動物分布調査報告書」[19]として発表されたことで、ようやく都内全域の生息状況が総合的に把握できるようになったが、同時に都内の生息地の多くが危機的状況にあることを認識させることになったのは皮肉である。

その後、都内の丘陵部の環境破壊はさらに進み、多くの生息地が消滅していったが、その状況を把握するための総合的調査は20年近くも行なわれて来なかった。

しかし一方では、「川口の自然を守る会」、「丘陵のトウキョウサンショウウオを守る会」、「トウキョウサンショウウオを守る由木の会」、「西多摩自然フォーラム」など、金井郁夫氏に活動を支えられた多くの市民団体により、各地で調査が続けられていた。

1998年、環境庁(当時)の「種の多様性調査」の一環として、東京都によって20年ぶりに都内のトウキョウサンショウウオの調査が行なわれた。この調査は、前述の都内各地の団体とともに「トウキョウサンショウウオ・ネットワーク」を結成して、調査や保全のための情報交換を行なってきた「西多摩自然フォーラム」が窓口となり、各団体や一般市民にも幅広く呼びかけて行なわれた画期的なものと言えるだろう。

5団体とのべ150名以上の一般市民が参加した「トウキョウサンショウウオ探検隊」によって、2ヶ月にわたって行われた調査では、213ヶ所の産卵場、4,701個の卵嚢を確認することができ、このデータをもとに東京都立大学(当時)理学部生物学教室で解析が行なわれた。

その成果は翌年発行された「トウキョウサンショウウオは生き残れるか? ~東京都多摩地区における生息状況調査報告書~」[49]としてまとめられ、以下のような点が明らかになった。

1. 開発や産卵環境の悪化により、1979年の調査当時約150 km²あった都内の生息域の面積が、約100 km²にまで減少している。
2. 一ヶ所あたりの産卵卵嚢数が減少していることから、個体群のサイズが小さくなる傾向にあると推定される。
3. 個体群動態モデルのシミュレーションにより、今後50年で個体群の集団が1/4程度にまで減少すると予測される。

この結果を踏まえて、「トウキョウサンショウウオ探検隊」では、今後の生息状況が長期間にわたってどのように変化して行くかを把握することの重要性を痛感し、活動を継続するため新たに「トウキョウサンショウウオ研究会」を組織した。

研究会では、各団体が定めた産卵場で卵嚢数や生息・繁殖環境などの経年変化を観察すると同時に、10年ごとに都内全域での一斉調査を行ない、状況の変化をいち早く把握して保全対策のために役立てることが確認された。また、これと平行して各地の研究者・団体・市民との情報交換や一般に対する普及啓蒙のためのシンポジウムも毎年開催し

ている。

2006年に行なわれた環境省によるレッドデータブックの改訂では、トウキョウサンショウウオについての前述の調査結果ならびに各地のデータに基づいてカテゴリーの見直しが行なわれ、それまで「保護に留意すべき地域個体群(東京都)」だったものが、全国的により危機的状況である「絶滅危惧Ⅱ類」とされるに至った。

2008年は1998年の調査から10年目に当たり、前回に確認した産卵場を中心に、再び都内の一斉調査が行われた。2008年だけでは全ての産卵場を確認できなかったことと、前回の調査では確認できなかった新たな産卵場が次々と見つかったため、2009年、2010年にも補足調査が行われている。

この結果、都内9市2町で404ヶ所の産卵場を調査し、335ヶ所で約9,000卵囊を確認することが出来た。調査には前述の団体に「青梅自然誌研究グループ」が加わり、5団体のべ254名が参加して、2～5月にわたって行なわれた。なお、今回は前回ほど積極的には一般市民への参加を呼びかけず、公開された形で調査を行う地域も一部にとどめた。

1.2 謝辞

今回のトウキョウサンショウウオの生息調査では、多方面にわたり多数の方々に協力して頂いた。また、報告書作成段階では、主に草野担当部分の原稿を一柳英隆氏に読んで頂き貴重なアドバイスを頂いた。また、新潟大学の羽角正人氏にはサンショウウオの件で貴重な情報を頂き、原稿の誤りについても指摘して頂いた。第2章のトウキョウサンショウウオの生態に関する知見の多くは、日の出町羽生での38年間に及ぶ野外調査の結果に負うところが大きい。羽生での調査では、故人である羽生傳吉・ミネご夫妻及びご家族に長年に渡る様々な援助を頂いた。ここに深く感謝申し上げる。なお、本報告書の印刷にあたり、公益財団法人日野自動車グリーンファンド(平成25年度)の助成を受けた。謝意を表したい。